

取材のお願い

公益財団法人古川知足会
古川美術館分館 爲三郎記念館

巴里に魅せられた画家たち

財団設立 40 周年記念特別展

異邦人たちのパリ ユトリロ キスリング レオナルド・フジタ

2026.10.17 [SUT] – 2027.1.31 [SUN]

平素は格別のご厚情を賜りありがとうございます。
古川美術館と分館爲三郎記念館を運営する公益財団法人古川知足会は設立 40 周年を迎えました。
設立以降、多くの方に支えられてまいりました。その感謝の想いをこめて、古川美術館でエコール・ド・パリを象徴する 3 人の芸術家・ユトリロ・キスリング・フジタの主要な作品を紹介する展覧会を開催いたします。彼らの芸術が花開く、そんな過渡期に描かれた作品の数々をご紹介します。財団の新しい歩みの一歩となる展覧会を是非とも貴媒体にてご紹介いただきたく、お願い申し上げます。



モーリス・ユトリロ「白い教会（サンラスティック通り）」1920年 個人蔵



財団設立 40 周年

財団法人古川知足会は、創設者・古川爲三郎が大切にしたい「美術を私蔵することなく、広く皆さまに楽しんでいただきたい」という思いを受け継ぎ、1987年に設立されました。爲三郎が長年にわたり親しんできた美術品を、より多くの方々と分かち合うために開館した古川美術館は、近代日本画をはじめ、洋画・工芸・陶磁器など多彩な作品を紹介しながら、“芸術が日々の暮らしにそっと寄り添う場所”として歩み続けてきました。また、爲三郎が晩年を過ごした数寄屋建築を公開する爲三郎記念館では、庭園や茶室の佇まいとともに、ゆったりとした時間を楽しんでいただける空間を育んできました。

設立40周年を迎える今年、ユトリロ、キスリング、レオナルド・フジタの作品をご紹介できることは、爲三郎が願った「芸術をひらく」という財団の精神を、改めて皆さまと共有する機会となります。

これからも古川知足会は、文化の豊かさを未来へつなぐ活動が続けてまいります。



異邦人とは

本展の最大の見どころは、20世紀初頭のパリに集った三人の画家が、“異邦人として世界を見る”という視点から独自の表現を生み出した点にあります。

ユトリロは、パリ生まれでありながら都市を“外側”から見つめ、静寂と祈りを宿す白い街並みを描きました。キスリングは、移民としての不安を抱えつつ、鮮烈な色彩でパリ社交界に自身の存在を刻みました。フジタは、日本の線描と西洋の光を融合させ、文化の狭間に立つ者だけが持ちうる繊細な感性で乳白色の世界を築きました。彼らの作品は、出自も画風も異なりながら、「境界を越えて世界を見る者＝異邦人」という共通のまなざしで結びついています。

本展では、三人が見たパリ、求めたパリ、そして残したパリの記憶を通して、エコール・ド・パリの精神を鮮やかに紹介します。



モーリス・ユトリロ「白い教会（サンラスティック通り）」1920年 個人蔵

本展ビジュアルデザイン 「白い教会」

（サンラスティック通り）

渉外に渡りアルコールに悩まされたユトリロの作品にはどこかしら孤独が漂います。それは当時のパリの華やかな一面ではなく、人気のないパリの街角をモチーフに下からといえます。そしてユトリロの絵の中に感じる孤独感の要因は封鎖された空間の様に街を描いているからなのです。なぜユトリロはこのような街並みを遺したのか。白に託したユトリロの想いを紹介します。

孤独をパリの漆喰の壁に託した モーリス・ユトリロ

モーリス・ユトリロは、パリに生まれながらも常に都市の“外側”に立っていた画家です。母スザンヌ・ヴァラドンの影響下で育ち、精神的な不安定さを抱えながら制作を続けた彼にとって、絵を描くことは世界との唯一の接点でした。ユトリロが見つめたモンマルトルの街角は、華やかな芸術都市パリの象徴ではなく、静寂と孤独が沈殿する場所でした。人影のない路地、曇天の空、そして漆喰の白い壁。彼が繰り返し描いたその白は、現実の風景であると同時に、



モーリス・ユトリロ「ムーランギャレット」1914年

彼自身の内面の孤独を映し出す“心の色”でもありました。

ユトリロは異邦人としてパリに來たわけではありません。しかし、彼の視線は常に都市の中心から少しずれた場所にあり、パリという都市を「内側から外側として見る」という特異な立ち位置を持っていました。華やかな芸術家たちが集うモンマルトルにしながら、彼はその喧騒に馴染むことなく、静かな祈りのようなまなざしで街を描き続けました。ユトリロの作品に漂う孤独は、異邦人としての境界感覚と響き合い、パリのもうひとつの顔を私たちに見せてくれます。

孤独を色彩で埋め尽くした モイーズ・キスリング

モイーズ・キスリングは、ポーランドからパリへ渡った移民画家であり、まさに“異邦人”としてこの都市に身を置いた人物です。第一次世界大戦への従軍を経て、彼はパリ社交界の中心へと躍り出ますが、その華やかな成功の裏側には、祖国を離れた者が抱える不安や漂泊感が常に存在していました。キスリングの作品を特徴づけるのは、豊かな色彩と生命力に満ちた画面です。鮮烈な赤、深い青、温かな黄。彼の色彩は、異邦人としての孤独を覆い隠すかのように画面を満たし、存在を強く主張する力を持っています。

キスリングは、異文化の中で自らの居場所を切り開くために、色彩を武器として使いました。彼の描く女性像は、異国の地で自分の存在を確かめるような強さと柔らかさを併せ持ち、静物画には彼自身の内面の揺らぎが滲み出ています。パリという都市は、彼にとって憧れであると同時に、常に自分の立ち位置を問いつける場でもありました。キスリングの色彩は、異邦人としての孤独と希望を同時に抱えた者だけが生み出せる、強い生命の輝きなのです。



モイーズ・キスリング「チューリップ」

孤独を白へと昇華させた レオナール・フジタ

レオナール・フジタ（藤田嗣治）は、日本からパリへ渡った異邦人として、東洋と西洋の狭間に立ち続けた画家です。彼の作品を象徴する“乳白色の白”は、単なる技法ではなく、異文化のはざまで揺れる孤独や葛藤を静かに昇華させた表現そのものです。フジタは日本の線描の伝統を携えながら、パリで西洋絵画の光と陰影を学び、両者を融合させることで独自の世界を築きました。彼の白は、異邦人としての緊張感、自己探求の深さ、そして文化の境界に立つ者だけが持ちうる繊細な感受性を宿しています。

フジタはパリで成功を収めながらも、常に「自分はどこに属するのか」という問いを抱えていました。日本人としてのアイデンティティ、西洋美術への憧れ、そして異文化の中で生きる者の孤独。そのすべてが彼の白に沈殿し、静かな詩情となって画面に立ち上がります。彼の描く女性像や猫、宗教画には、異邦人としての視点が生む独特の距離感と緊張が漂い、見る者を深い静けさへと導きます。フジタの白は、異文化のはざままで熟成された孤独が、芸術へと昇華した結晶なのです。

本展の見どころ

① ユトリロ — 日本初公開と“奇跡の再会”

ユトリロが亡くなる直前、自らの意思で出品した作品がついに日本初公開。

さらに、1959年の大回顧展で披露された作品が、半世紀以上の時を経て本展で再び巡り合うという、心に残る再会が実現。



ユトリロ
「サンヴァンサン通り」

日本初公開
ユトリロ最初期の作品。
アルコール治療のために絵を描き始める。
始めは母・ヴァラドンの勧めでモンマニーの丘の上で限られた絵具で描いていた。本作がユトリロが亡くなる直前に開催された展覧会に出品された幻の作品

② キスリング — 戦前から戦後へ、長い時間の流れをたどる

キスリングの作品は、戦前の華やかな色彩から、戦後の落ち着いた表現へ。

長い時間の幅を通して画風の変化を味わえるラインナップが魅力です。異国の地で生きる彼の揺らぎや希望、時の流れが感じられます。



キスリング「花」

戦中、アメリカからパリに戻ったキスリングの目の前にはすっかり姿が変わったパリの様子が。彼はかつての芸術の都パリをめざし、若い画家たちを集めて展覧会を開く。本作はその時に出品されたと考えられる。カラリストであったキスリングの色彩は落ち着きを見せ、モチーフに十分な量感を感じられる。

③ フジタ — 若き日の葛藤と憧れが見える作品群

パリに渡ったばかりの若きフジタが、ピカソの影響を受けながら自分の表現を探し続けていた時期の作品が並びます。

憧れと葛藤が交差する“若き異邦人フジタ”の姿が立ち上がる初期作品から日本から度々つことを決意した年代の作品まで、豊富なラインナップ

展覧会情報

名 称 古川美術館財団設立 40 周年記念展

「異邦人たちのパリ — ユトリロ / キスリング / レオナール・フジタ」

日 時 2026 年 10 月 17 日（土）～ 2027 年 1 月 31 日（日）10：00 － 17：00

休館日 月曜日（但し、月曜日が祝日の場合は開館し、翌平日に休館）
2026 年 12 月 26 日－ 2027 年 1 月 6 日

主 催 公益財団法人 古川知足会

後 援 愛知県教育委員会 名古屋市教育委員会
中日新聞社 CBC テレビ 東海テレビ放送 スターキャット株式会社

入館料 ①古川美術館と分館爲三郎記念館の共通券 一般：1,500 円 高大生：500 円
②美術館単館券 1,200 円 ③記念館単館券 600 円
※①～③にかかわらず中学生以下は無料 ※②、③は年齢区分なし

イベント ギャラリートーク・プチギャラリートーク等は複数回開催 詳しくはお問い合わせください。

お問い合わせ

公益財団法人 古川知足会 古川美術館分館爲三郎記念館 学芸課 052-763-1991

名古屋市千種区池下町 2-50

担当学芸員：林 奈美恵 mail: n_hayashi@furukawa-museum.or.jp